

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/03/1 ～2018/03/31)

※^{アハトゥン}Achtung!(注意!)：本報告書はドイツ・デュッセルドルフ大学からのものですが、今月の報告書は諸般の都合により、そのほとんどがスイスに関するものです。デュッセルドルフについてのテーマを読みたいという読者様には申し訳ございませんが、何せデュッセルドルフに1ヶ月ほど滞在しておりませんでしたので、温めていたネタを全て出してしまおうと、再来月以降書く事が無くなってしまおうのです。[デュッセルドルフ大学からの報告書] という体裁を守るためにも、デュッセルドルフについてのテーマを減らすという私の決断を、どうかご理解くださいますようお願い致します。

1. 勉学の状況

あまり書くこともないので今月もお休み。

2. 生活の状況

【薔薇の月曜日にカーニバル見に行ったら荒廃の世すぎて楽しい】

ケルン・デュッセルドルフなどのドイツ西部では2月の第2週から第3週にかけてカーニバルが行われる。2018年は2月8日～2月14日まで行われ、老若男女が仮装をして街に出て、酒を飲む・踊る・パレードを見学する・女性は男性のネクタイを切る(!)など、普段の安全なデュッセルドルフなど見る影も無い、まさに「荒廃の世」という言葉が相応しい社会になる。私はこの期間中、デュッセルドルフとケルンへと出かけてそれぞれの街の様子を観察してみた。

カーニバル初日、まずはデュッセルドルフの^{アルトシュタット}Altstadtに行き、カーニバルが如何様なものなのかを見物することに。現地に到着した私は開いた口がふさがらなくなる。観光客と地元民の話し声で賑やかなあのAltstadtの通りにディスコミュージックがガンガン流れ、通りを埋め尽くす人々が踊り狂っていた！社交ダンスなんかと違い、型も何も無く、皆メチャクチャに踊っている。(だが、それでいい。それでこそカーニバルなのだ!) まるでそう訴えてくるかのように、心から楽しそうに動き回っている。

広場に出ると仮装した人々がビールを飲み、友と戯れながら騒いでいる。(人々といっても一部ではない。大多数が仮装しているので、仮装せずに行った人の方が逆に浮いてしまうくらいだ。) まあ、何せ1年に数回の、公然と騒ぐ事が許された日なのだ。浮かれて当然といえば当然である。しかし物には限度があるというのはどの世界でも共通のようで、酒に吞まれていきすぎたお戯れをした人が、時々警官隊に取り押さえられる場面が目撃された。ある意味、警官にとってはテロ警戒よりも辛いのでは無いだろうか。騒いでいい日なのに理性的に職務を全うしなけれ

ばならないのだから。そんなどうしようもないことを感じた日であった。

翌週の『^{ローゼンモンターク}薔薇の月曜日』、この日はパレードが行われるのでケルンに行くことにした。ドイツに来るまで知らなかったが、ケルンのカーニバルは結構有名らしく、毎年 100 万人の観光客が訪れる大きなイベントなのだそうだ。そんな楽しそうなイベントに行かないという手は無いだろう。ということで昼下がり、ケルン中央駅を降りると、人間の帯が大通りの両脇に延々と続いていた。何が起こっているのかよく分からないのでケルン大聖堂に続く階段を登って振り返ると、馬車に引かれた巨大な山車に乗った道化者が笑顔でお菓子を振りまき、音楽隊が軽快な音楽を奏で、チアリーディングのような格好をした女性たちが、息の合ったダンスで華を添える。それに加えて、どこにいるか分からない司会者が、続々と来る山車を紹介しながら時々「ローゼンモンターク！」と声を張り上げると、それに続いてオーディエンスが「アラフ！」と答え、ますます盛り上がっていく。舞い落ちるお菓子・それを掴もうと手を伸ばす老若男女・しがらみも何も無い、純粹で真っ直ぐな笑顔、子供の頃になんとなく夢想した、他人のことなんか考えなくても皆が幸せな、甘い甘い夢のひとつがこの世に現れたかのようであった。

しばらくパレードを見物し、飛んできたお菓子もそこそこ拾ってホクホク気分な帰路の中で、同時にあることについて考えていた。帯を成してパレードを見物する人々の傍で、ビール瓶やゴミを漁っている浮浪者の姿をちらほら見かけたのだ。果たして彼らはパレード自体を、あるいはパレードの日をどういう思いで過ごしているのだろうか。浮かれた人々が捨てていく、いつもより多い稼ぎのタネにありがたい思いでいるのだろうか、それとも甘い夢さえ見れずに、黙々と日々の糧をもらいに行く自分に、惨めさや悲しさを感じているのだろうか。(これは相当に失礼で自分を上に持ち上げた考えであるが、その当時筆者が感じたことをそのまま書いた物であり、自分なりに己の不遜さを理解しているつもりである。) パレードの期間は甘さが目立つ分、少し視点をずらすと苦さもまた濃く深く感じられる。自分がその現状に対してどうすべきなのか、どうしたいのかも分からないまま、現実の家路を私は歩むのだった。(この報告書を読んでいる賢明な読者諸君には、パレードを見に行く時はこんなことを考えたりせず、どうか純粹に楽しさに溺れていただきたい。)

【東南欧 26 泊 28 日の旅：チューリヒ編第 1 話～まさか、旅立ちの日に～】

2 月 28 日 23 時 8 分、ヨーロッパでも稀な大寒波が襲来していたとき、2 人の男はデュッセルドルフ中央駅にいた。これから始まる旅にワクワクしながらも、初日で国境を超えられず強制送還されるかも(その理由は前話参照)、というドキドキも混ざって、なんとも形容しがたい気持ちでいた。飲料などの買い物を済ませいよいよホームへ。

列車が来るのを待っていると、「新聞いらんかい？」と身なりが綺麗でないおっちゃんが話しかけてきた。筆者たちは「いらん」と素っ気なく答えると、おっちゃんはスッと離れていった。寒さに耐えきれなくなったのか、友人が持っていたトートバッグから帽子を取り出そうとして手が止まった。「あれ、帽子がない…。」けれども探しに行く時間も無く、特段高い帽子という

わけでもなかったのに、仕方がないと諦めようと決断した。その時、新聞売りのおっちゃんが我々の前を再び通り過ぎると、友人は目を見開いてポツリと一言、「あの帽子、俺のやつやん…。」そう、話しかけてきたあの時、おっちゃんは気づかれることなく友人のトートバックから帽子をスっていたのだ！イタリアでのスリを警戒していた我々は、まさか住み慣れたデュッセルドルフでスられるとは思っておらず、開始わずか 20 分で起こったこの悲劇に為す術もなく、お互い顔を見合わせて笑いながらも、寒さと怖さで身体は恐々諤々と震えていたのだった。23 時 46 分、EC170 号は 10 分の遅れで出発。闇を切り裂きながら一路スイスへ向かう。

午前 2 時を過ぎたあたりだろうか、ウトウトしていた私は友人に起こされた。傍らには無表情の車掌さん。ついにやってきたドキドキの国境越え検札の時間である。まずは列車のチケットを差し出す。これは当然問題なく帰ってきた。チケットを受け取り、(さあ、いよいよパスポートチェックや、何としても切り抜けたる！) 大学入試以来の覚悟と緊張感で身構えていた私。いざパスポートを取り出そうとしたその時！「ありがとう。」と言い残して車掌は離れていった。なんとパスポートチェックをしなかったのだ。(えらく信用されたもんなあ…)と拍子抜けしたのだが、よくよく考えれば、仮にチェックされたとしても問題はなかった。スイスは永世中立国なので、EU にもシェンゲン協定にも加盟しておらず、入国に差し障りはなかったのだから。

不必要だった緊張感から解かれ、眠りという長いトンネルを抜けると雪国だった。どうやら終着のひとつ前の駅のような。降りる準備を済ませているうちに、EC170 号はスイス北部の玄関都市・バーゼルに到着した。デュッセルドルフから 7 時間、我々はいよいよスイスの地を踏みしめた。第 1 歩目は異国の地に来た感慨にふけていたのだが、第 3 歩目にはそんな感情は消し飛んでしまった。その日の天気は雪、大寒波の影響は依然として続いており、尋常ではない寒さなのだ。さっさと列車を乗り換え、目的地のチューリヒへと向かうことにした。

1 時間ほど経ただろうか、我々はチューリヒに降り立った。まず最初にするのは両替。スイスは非ユーロ圏で、スイスフランという独自の通貨を運用している。レートは 1 ユーロ=1.1~1.2 スイスフラン、1 スイスフラン=118 円程度。そこそこの手数料を取られながらも両替を済ませ、大きい荷物をコインロッカーに預けたら駅中探索へ。外に出してあるレストランのメニューを見てわかったのが、やはり物価が異常に高いことだ。曖昧な記憶だが、飲み物とクロワッサンの朝食セットが 900 円程度、稼ぎの無い学生には厳し過ぎる物価水準である。金銭に余裕のない旅行者は『COOP』というスーパーマーケットで食料を買って、食費を抑えられるだろう。特に『COOP』の自社ブランド品はかなり値段が安く、それでいてクオリティーは相当高いものであった。ひとしきり見回り、適当なレストランに入って食事を済ませた後、駅舎を出てみると地元民が噴水の前で写真を撮っていた。それもそのはず、流れる水あってこそその噴水が完全に凍りついているのだから。(今日は人間が活動できる日やない)と判断した我々は、その日の観光をスッパリ諦め、早々にホテルにチェックインして翌日以降の観光に備えるのだった。

【東南欧 26 泊 28 日の旅：チューリヒ編第 2 話：～酸いも甘いも高級時計から～】

今回の旅の私的最大の目標であり、高校生の時から憧れていたことに『スイスブランドの良質な

腕時計を持つ』がある。カッコイイ大人は良い装飾品(これは決して値段が高いもの、という意味ではない)を身に付けるもの、(今はまだまだ遠くても、いつかはその時計に相応しい大人になる)というモチベーションと目標を得る為、それに(タックスフリーで安く買えるし、本場で買うなら今しかない)という下心も加わり、今回の旅で購入することを決断した。

チューリヒ滞在中のある日のお昼過ぎ、駅前通りを訪れてみると流石スイス、多くの時計屋が軒を連ねている。事前に目星を付けていたお店を訪れショーケースを眺めてみると、気になるブランドの時計がいくつかあったが、お店に入ることに緊張してしまい中々入れない。何せ大金を使ったのなんて、免許合宿費用の支払いくらいなものなので、どうしても力が入ってしまう。結局7、8分かかって思い切って入店。店員さんにブランドをいくつか言ってカタログを持ってきてもらい、その中から自分の好みにあった商品を見せてもらった。

試しに装着してみた私は困惑してしまった。カタログで見た時の印象と、実際に腕に付けた時の印象がかなり異なるのだ。私に担当して下さった店員さん曰く、「机に置いた時と腕に付けた時とでは、表情がまるで違ってくるのです。ですから、事前にお気に入りの時計があったとしても、是非一度は試着してみてください。」とのこと。その方は青二才の我々にも非常に丁寧に対応してくださり、私に似合いそうな時計を次々と持って来てくださった。そこからいくつか購入候補を選んで、「他の店でも見てみたい」と言って一旦離れた。これは本音半分、少し落ち着く時間が欲しかったのが半分であった。

その後、外観が気になるお店にいくつか入ってみたのだが、いずれのお店も扱っている平均価格帯が高く、(自分にはまだ早いなあ)と痛感させられた。学生のくせに生意気なことをしている、とお思いの読者もいるかもしれないが、このようなアクション自体が、学校では習えない非常に良い経験であり、大人になるまでに必要な勉強だと私は思う。各ブランドが持つ格調高さと重みを知れる上、その重みを自分が背負っていけるかどうかを判断する、『自分の人生に対する自己評価』を確認できるまたとない機会であるからだ。結局、目星を付けていたお店に戻り、さらに購入候補を絞り込んでいくこととなった。その後さらに商品を持って来てもらったり、お客さんで来ていたナイスミドルなおじ様にも意見を聞いたりして、遂にお気に入りの一本を見つけた。(これからこの時計が止まるか、自分の心臓が止まるまで、大切に身に付けていくんだ)と思うと、表情筋が上手く働かず、もうニヤニヤが止まらない。間違いなく生涯記憶に残る買い物となった。

そして購入手続きを進めていき、初体験となるタックスフリーの申請を行った。クレジットカードで支払う場合、①一旦本体価格と消費税が仮引き落としされ、②空港や国境にある駅などの税関で買った商品の現物を提示し、必要な書類を提出して認可された後、③許可証の入った手紙をお店に送ることで、④消費税分の引き落としがキャンセルされる、という仕組みである。必要書類に記入した後、税関提出用の書類を貰ってお店を後にした。(応対して下さった店員さん、本当にお世話になりました。)

ホテルに戻り友人と相談した結果、ミラノへの移動日に税関に行くのは面倒だという結論に至り、翌日空港に行って申請することにした。一生モノの買い物に満足いくまで時間をかけ、お気

に入りの時計を見つけられた喜びに満ち満ちていた私は、(タックスフリーの申請なんてお安い御用だ!)なんて思いながら、ホテルでローストチキンを頼張るのだった。翌日空港であんなことになるなんて、つゆほども知らずに……。

[次回予告]…買ったばかり時計を付け、誇り高き勇者のような気持ちで税関に向かう筆者。しかし税関職員が放った一言によって、その場は敵と対峙したかのような緊張感に包まれる。両者が睨み合う中、税関職員が召喚した“第三勢力”によって状況はさらに混迷を極めていく。果たしてこの門をくぐり抜けることは出来るのか。^{ネヒステマール}Nächste Mal、【東南欧26泊28日の旅：チューリヒ編最終話～実録ドキュメント、スイス税関で水際の攻防～】

今回は【景品は家一棟、1万ユーロ!? ドイツのマクドナルドでモノポリー試してみた】、【東南欧26泊28日の旅：チューリヒ編外伝：～侯爵が統べる、あの国へ～】、【東南欧26泊28日の旅：チューリヒ編最終話～実録ドキュメント、スイス税関で水際の攻防～】について書いていこうかと思えます。